

イスラームと他宗教の共存

——インドネシアの事例から考える——

加藤久典

はじめに

二〇一七年一月アメリカ合衆国にトランプ大統領が誕生した。これまでイスラームに対して差別主義的な発言を繰り返してきたトランプ氏が世界で最も影響力があると言われる重要なポジションに就いたことは、今日の世界を象徴するような出来事だったと言えるのではないだろうか。つまり、イスラームを基盤とする世界とそうでない西側の非イスラーム世界との大きな溝が存在するということだ。ハンティントンは「文明の衝突」の中でイスラームと西側文明の共存の困難さを指摘している⁽¹⁾。

もちろん、イスラーム圏七か国からの入国を禁止する大統領令⁽²⁾に対するアメリカ国内で反トランプ運動は全国で起きたし、すべてのアメリカ国民や西側諸国がイスラームと敵対しているわけではない。しかしながら、イスラームに関連したテロリズム

ムがこの世界に大きな脅威を与えていることは事実だろう。果たしてイスラームはテロリズムを肯定し、他宗教との共存を拒否するものなのだろうか。この問いへの答えを探ることは、イスラームをより包括的に理解することにつながり、今後の世界の在り方に重要な指針を与えるのではないか。

本稿では、イスラームの教義がどのように他宗教や異教徒を捉えているかを検証すると同時に、ムスリムが実生活の中でどのように教義を実践しているのかということについて世界最大のムスリム人口を抱えるインドネシアにおける事例をもとに分析する。

一 イスラームにとっての他宗教

イスラームにおいてムハンマドは、神の言葉を受け取る者、つまり「預言者」とされている。そしてイスラームの歴史解釈

によれば、ムハンマド以前にも多くの預言者が神によって遣わされた。イエス・キリストやモーセ、アブラハムなどである。預言者はあくまで人間であり、キリスト教がイエス・キリストを神の子とするのとは根本的に異なる。だが、イスラームはユダヤ教やキリスト教をアブラハムの宗教に連なる「啓典の民」として、イスラームとの連続性を否定せず、ある一定の認知を与えている。このイスラームの歴史的理解においては、あくまでムハンマドは「最後の預言者」であり、以降はいかなる預言者も出現しないとされている⁽³⁾。

このイスラームの歴史理解の根本にある思想は、イスラームはそれ以前の宗教に比べ、より完成された神の言葉の最終版を人間に提出したということだ。すなわちそれは、イスラームの他宗教に対する優位性を明確に示している。歴史上最も完成された宗教であるイスラームは、すべての宗教の最上位に位置するというのがその教えの根本原理である。それを端的に示しているのが、コーランの次のような一節である。

すなわち、たとえ多神教徒が嫌っても、お導きと真実の宗教とをもたせ、これがあらゆる宗教にまさることを宣言するために使徒を遣わしたもうたお方である。

(コーラン…第九章三三節)

また、イスラームが最終的な宗教であり、それまでのユダヤ教、キリスト教が過ちを犯したのだという教えもコーランには明確に示されている。

神のみもとの宗教こそイスラームである。啓典を授けられた人々が相争うに至ったのは、叡智を授かっておきながら、互いに憎悪の心を起こしたからに他ならない。

(コーラン…第三章一九節)

こういったイスラームの優位性は、「啓典の民」の宗教のみならずコーランには明記されていない仏教やヒンズー教、などの他宗教にも適用されるとされている。

二 異教徒との共存

では、イスラームは他宗教との共存を拒否し、異教徒(カフイル)を排斥する宗教であるのだろうか。「コーランか剣か」という言葉を用いて、自らの道に従わない者を抹殺することを是とする宗教なのだろうか。実はこの「コーランか剣か」という言葉は、イスラームの教義からすると全く不適切な表現である。イスラームにはこういった強制的な改宗を認める教えはない。実際コーランには、次のような啓示がある。

宗教には無理強いがあってはならない。

(コーラン…第二章二五六節)

イスラームを信仰しない者であるカフイルは、ムスリムにとっては地獄へ行くことが明らかになっている憐れむべき存在である。故に、ムスリムはカフイルを自らの宗教に招き入れようとする。しかし、その行動は強制的な力によるのではなく伝導(ダクワ)によって行われるべきであるというのが、イスラ

ームの「原理」を重要視する者たちの思想である。

カフィールには、「守られるカフィール」(カフィール・ズイミ)と「敵対するカフィール」(カフィール・ハルビ)の二者に分けられる。前者は、「經典の民」を始めとした異教徒がイスラームの地において、改宗することなく居住を求めらるるならば特別税(ジシア)を支払うことよって、ムスリムから保護を受けることができる。イスラームが支配する地域においては、このように異教徒は宗教を選択する自由を与えられている。

「聖戦」と訳されているジハードも本来の意味は「努力・奮闘する」という言葉であり、即武力の使用を意味するものではない。⁽⁵⁾確かにコーランには戦いを認め、異教徒への攻撃を是認する啓示もある。

おまえたちの出あったところで彼らを殺せ。お前たちが追放されたところから彼らを追放せよ。迫害は殺害よりも悪い。しかし、彼らがお前たちに戦いを仕掛けないかぎり、聖なる礼拝堂のあたりで戦ってはならない。もし彼らが戦いをしかけるならば、彼らを殺せ。不信者の報いはこうなるのだ。しかし、彼らがやめたならば、神は寛容にして慈悲ぶかいお方である。

(コーラン：第二章一九一〜一九二節)

イスラームにおいては、この啓示からもわかるように無差別な殺人や異教徒への迫害が是認されているのではなく、あくまでも攻撃を受けた場合に武力を使うことが許されている。シリア

派、スンニー派の多くの法学者は、こうした「防衛のためのジハード」(ジハード・ディファイイ)のみがゆるされた武力使用であるとの立場をとっている。⁽⁶⁾だとするならば、イスラームの教義で原理的に許されていない無差別殺人であるテロリズムがどうして起きてくるのだろうか。それには、イスラームという宗教を包括的に理解する必要がある。

三 宗教の在り方

イスラームに限らないが、宗教は神学的視点と社会学的視点から理解することが可能だ。神学的に宗教を理解する場合には、その宗教の原理的理念を議論の対象とする。一方後者の視点は、その宗教を信仰する人間の行動により重点を置く。イスラームに当てはめて考えれば、神学的アプローチを「イスラーム社会」理解、また社会学的アプローチを「ムスリム社会」理解と呼ぶことも可能だ。前者のイスラーム社会を考えたときには、テロリズムという無差別暴力主義は前述のように是認されない。しかし、後者のムスリム社会においては、その信者たちがそれぞれの暮らしの中で、歴史、地域性、政治的状況、経済的状況、個人の思想などに影響を受けながらより柔軟な教義解釈を行っているのが現実である。その意味で、テロリストとは、イスラームのジハードの教えを自らの置かれた状況や独自の解釈によつて暴力主義を肯定する「ムスリム社会」に生きる者たちと定義づけることが可能だ。しかし、彼らがイスラームとい

う大きな枠組みから逸脱しない限り、つまりアラアを唯一神として認め、その使徒としてムハンマドを受け入れ、その他の教えや義務を遂行する限り、その行動が暴力的で原理的教義から逸脱していても、彼らはムスリムとしての認知を受ける。そこに、イスラームそのものが持つジレンマがあると云っていいだろう。

ただ、この柔軟性を持って教義を解釈し実践していくムスリム社会の住人は、テロリストのみに代表されるわけではない。むしろ、過激な暴力主義者は少数で大多数のムスリム社会の住人は、寛容で穏健であると言っている。このことがイスラームと他宗教との共存の大きな鍵になる。イスラームとそれ以外の宗教との融和が成立し、ムスリムと非ムスリムの共存は果たして可能なのだろうか。

これまで述べてきたように、イスラームの原理に異教徒を暴力的に排斥する教義を見つけることはできない。その意味で、物理的共存は不可能ではない。ただ、神学的観点からこの問題を論じると、イスラームと非イスラームの溝は大きいことに気づく。それは、イスラームがアブラハムの宗教として最終のとして完成された最善の宗教とされているからだ。加えてイエス・キリストは神の子ではなく預言者の一人で、ムハンマドが最後の預言者であるという教えを、キリスト教徒は決して受け入れることはできないだろう。そこからは、相互不信と憎悪が生まれる可能性がある。宗教の共存の議論における神学的アプ

ローチの脆弱性を否定することはできない。

四 ムスリム社会の現実

イスラームが多数派でありながら、イスラーム以前の仏教、ヒンズー教、キリスト教、土着宗教などが共存している世界で最も多いムスリム人口を抱えるインドネシアには、イスラームと他宗教の共存の現実を見ることができている。それは、様々な社会的要因に影響を受けるいわゆる「ムスリム社会」に顕著にあらわれている。

インドネシアにおいて「イスラーム社会」の構築を目指すものは、イスラームの原理的教えから逸脱する先祖崇拜や聖人崇拜を行うことはない。しかしながら、実際には、多くのムスリムたちはアラア以外の聖なる者に対して、超人的な神性を見出し、時に「崇拜」する行為も行っている。例えば、北ジャカルタにあるジャミ・クラマツト・ルアール・パタンモスクにおいては、聖人とされるアブバカル・アライドウリスの墓がモスク内に作られ、多くの参拝者が後を絶たない⁽⁸⁾。ここでは、その聖人の持つ超人的な力を指輪に込める儀式も行われている。こういったイスラームの原理に反するとさえ思われる行為を、実際には多く見ることができている。イスラームの原理的教義を柔軟に解釈した結果だ。

その他にも、ジャカルタにあるタンジュン・プリオック地区では、さらに大規模な聖人崇拜が行われている。ムハンマドの

末裔で、かつてスマトラからジャワにイスラームの布教のため旅をしていたムバ・プリオックという聖人の墓は、信仰の対象として全国から多くの人々が訪れるいわゆる聖地となっている^⑨。ムバ・プリオックの霊廟では、老若男女がそれぞれの世俗的願いが叶うように祈りを捧げている。アラール以外に願いの成就のために祈ることは、イスラームの王道からは逸脱した行為である。

また、このムバ・プリオックの墓の敷地内には、この聖人の末裔であるアリ師とその家族が居住し信者の尊敬と信奉を集めている。これはイスラームの原理的教義で禁じられている個人崇拜に当たるとも言える。例えばアリ師が祈りを始めると、人々は競うようにポトルに入れた水を差し出す。つまり、その普通の水はアリ師の特別な力によって「聖水」に変わると信じている。これは明らかにイスラームで禁じられているシヒール（魔術）である。加えて、このムバ・プリオックには多くの神話が残されている。二〇一〇年に霊廟の土地の立ち退きを巡って、アリ師とその家族、信者と警察当局との間で武力衝突があった。死者を出すほどの大きな事件だったが、その際にムバ・プリオックにより多くの奇跡が起こされ信者たちを守ったという。こういった「神話」もイスラームの教義では信じることが禁じられている。

だが、多くのムスリムは教義の原理よりも世俗的な願いの成就に重きを置いてイスラーム本来の教えをより柔軟に解釈して

日々の暮らしを送っている。一見して神学的には必ずしも「正しい」行いでないとしても、それが一般化してしまえば一つの宗教的行為となる。そこで、信者たちはそれぞれの環境に見合った現実的な見地を持つようになる。

こういった態度は、イスラームの独善性を退け、すべての宗教が等しく完成されたものであると考える柔軟な思想を持った「ムスリム社会」の住人を生むことにもなる。それを代表するのが、インドネシア最大のイスラーム団体を率い、第四代のインドネシア大統領を務めた故アブドゥルラフマン・ワヒド氏^⑩やその思想の流れを汲む宗教学者であるウルル・アブシャー・アブダラ氏だ。彼らは、イスラーム伝播以前の宗教の影響が多く残る多宗教社会であるインドネシアの社会的、歴史的状況を無視することなくイスラームを解釈していくという立場をとっている。

先に述べたように、他宗教との共存はイスラームの神学的な立場から理論的には可能だが、キリスト教などの他宗教からするとイスラームが提出する共存のための教えをそのまま受け入れることは難しいだろう。しかしながら、この神学的議論を棚上げしてそれぞれの宗教の信者がそれぞれの教えを柔軟に解釈し実践する「社会的共存」は不可能ではない。インドネシアと同じ東南アジアのフィリピンのミンダナオ島においては、キリスト教が多数派でイスラームが少数派という状況の中で、神学に基づく両宗教の融和は難しいが、例えば自然災害時などに相

互扶助を行うことや、地域コミュニティの施設建設や維持など、普段の社会生活における共存は問題なく実践されている⁽¹¹⁾。言葉を換えて言うならば、教義の厳格な解釈ではなく、柔軟な態度でそれぞれの社会環境に合った宗教実践を行ういわゆる「ムスリム社会」「キリスト教徒社会」においては、それぞれ宗教を信じる「人間」たちにとっては実際の共存が神学的純粋性に先立つのだ。

五 インドネシアの知恵

インドネシアは二〇世紀半ばまで、オランダと日本により三〇〇年以上にわたる植民地支配を受けた。その間、インドネシアの文化は遅れた野蛮なものとして顧みられることはなく、また多数派宗教であるイスラームは、インドネシア社会でごく一部の反乱を除いて大きな役割を果たすことはなかった⁽¹²⁾。しかしながら、太平洋戦争の終結が近づきその独立の現実性が高まってきたとき、インドネシアはイスラームをどのように新国家に位置づけるのかという判断を迫られた。つまり、イスラーム中心の国家を建設するのか、またはムスリムという多数派を抱えながら世俗的な国家を目指すのかという選択である。

一九四五年六月に独立準備調査会において憲法の草案について話し合われた際、独立運動を牽引してきたスカルノは、インドネシアにおいてイスラームを国体の中心に置くのではなく、世俗体制を採用することを主張した。しかしながら、イスラ

ム法を採用しイスラームによって新しい国家づくりを進めたいムスリム指導者らと意見の対立が起きた。事態の打開のためにスカルノは、「大統領、および副大統領はムスリムであること」「ムスリムはイスラーム法に従うこと」などのムスリム側の主張をある程度受け入れた妥協策を提案する⁽¹³⁾。

同時に、スカルノは独立準備調査会の演説で後のインドネシア共和国の国家五原則（パンチャシラ）の元になる理念を発表した。①「民族国家の建設」②「国際協調」③「協議・代議制に基づく英知によって指導される民主主義」④「公正にして繁栄した社会をめざす社会正義」⑤「全知全能の神の信仰」がその内容である。スカルノはそれぞれの宗教の信者が、それぞれの教義に従ってそれぞれの神を信仰するべきであると考えていた⁽¹⁴⁾。

一九四五年八月の独立宣言後には、ムスリムに配慮した正副大統領の宗教資格やイスラーム法のムスリムへの適用などが削除された憲法草案になり、新しいインドネシア国家はイスラーム色を薄めての出発となった⁽¹⁵⁾。スカルノは、インドネシアの多宗教性を鑑み、イスラームの突出を避け、他の宗教との共存を目指すモデルを提出した。憲法の前文には、国家五原則（パンチャシラ）の第一番目として、特定の宗教に言及しない「唯一神の信仰」を掲げた。これは、すべての共和国の国民がどの宗教を信仰していても、共和国の国民として平等に存在するという理念に基づいている。

このパンチャシラ思想は、「唯一神」を明言しているというだけで多神教である仏教やヒンズー教と相いれないのではなく、という疑問が出るのは当然のことだろう。しかしながら、この理論的な矛盾に対してインドネシアの人々は、「唯一の宗教を信じる」ということでは何も変わりがないとして厳密な神学的議論を避け、「唯一神の信仰」を柔軟に解釈し「宗教を持つ者すべての共存」という理念を維持しながら暮らしている。このパンチャシラ思想が政治的妥協の産物だとしても、「いかにすべての宗教の共存を可能にするか」という困難な課題に対して、歴史上様々な宗教が存在しそれらが時に交錯した地域的特徴を持つインドネシアが生み出した一つの知恵ということに変わりはない。

六 パンチャシラの現在と今後

すべての宗教の社会的共存を目指した国家原則であるパンチャシラは、現在学校教育現場でも正式なカリキュラムに沿って教えられ、大多数のムスリムに当たり前のように受け入れられている。その「大多数のムスリム」は、柔軟に教義を解釈し地域性を考慮に入れて宗教に向き合う人々、つまり「ムスリム社会」の住人たちだ。しかしながら、同時に一九四五年の独立宣言、憲法の起草の段階でイスラームを国家体制の根本に据えたいと考えたムスリム、つまり「イスラーム社会」の構築を目指す者たちの中には、パンチャシラの受容を潔しとしない者が多

くいることも否定できない。

いわゆるイスラーム原理主義団体は、国家転覆罪に問われることを危惧して明確にパンチャシラを拒絶することはないが、最も完成された宗教であるイスラームとそうでない宗教との差別化を明確にした上で、他宗教との共存を目指すという基本姿勢を放棄することはない。こういったイスラームの唯我独尊的態度は、他の宗教からは敬遠されてしまっだろう。

注意すべき点は、イスラームの柔軟性に富んだ解釈で厳密な神学的議論に重きを置かないムスリム社会の住人たちは、自らが敬虔なムスリムではないという意識は持ち合わせていない。むしろ、イスラーム的服装の着用や喜捨や慈善行為、金曜礼拝や巡礼への積極的遂行など、イスラーム的行為を進んで行う。よって、彼らのムスリムとしてのアイデンティティを否定するような行為に対しては極めて敏感に時に感情的に反応する。そのときこそがパンチャシラ思想により維持されてきた「宗教の共存」が脅かされるときだろう。

その顕著な例が、二〇一七年四月に行われたインドネシアの首都ジャカルタの知事選挙だ。キリスト教徒であるバスキ・プルナマ氏¹⁸⁾は、その行政能力の高さと高潔な政治姿勢により住民の強い支持を受け、知事当選は確実と見られていた。しかし、選挙に先立つ二〇一六年九月に行った演説の中で、異教徒（キリスト教徒）を指導者としてはならないと解釈できるコーランの一説に触れ、世論の大きな反発を受けた。結果、バスキ・プ

ルナマ氏は知事選に落選したばかりではなく、宗教侮辱罪で収監されることとなった。

この事件の背景には、政治的な思惑があることは否めないがムスリムが大多数を占める大衆が感情的に反応したことも確かだ。⁽¹⁹⁾ 普段は「ムスリムと異教徒の間には、何のわだかまりも持っていない」と考える者たちがイスラームが侮辱されたと感じると、突如としてプルナマ氏の能力に対する理性的判断とは別に感情が先走り、キリスト教徒であるプルナマ氏への支持を取り下げてしまう。こういった現象は、パンチャシラの精神が国家の柱として公式に定義されている一方で、イスラームと他宗教との融和がムスリム個人の感情に大きく左右されるということの証明でもある。その意味で、イスラームを含めたすべての宗教の共存は、パンチャシラという公式のメカニズムに加えて、自らと異なる宗教を持つ者への配慮と敬意という個人的な感情の涵養が重要になってくると考えられる。このことは、インドネシアのみならず、冒頭で述べたアメリカ合衆国を含めた他の地域にも言えることだろう。

本稿は、JSPS 科研費一六K〇二〇〇四の助成を受けたものです。

参考文献

井筒俊彦『コーランを読む』岩波書店、一九九五年
大塚和夫編『イスラーム辞典』岩波書店、二〇〇二年・二〇〇九年改訂

片倉もと『イスラームの日常世界』岩波書店、一九九三年

永井重信『インドネシア現代政治史』勁草書房、一九八六年

Esposto, John L. (et al.), *The Oxford Encyclopedia of the Modern Islamic World Volume 2*, New York: Oxford University Press, 1995.

Huntington, Samuel, *The Clash of Civilizations*, New York: Simon & Schuster, 1996.

Kato, Hisanori, *Verity or Illusion? Interfaith Dialogues between Christians and Muslims in the Philippines*, Jakarta: Centre of Asian Studies, 2008.

Kato, Hisanori, "Philanthropic Aspects of Islam: The Case of the Fundamental Movement in Indonesia," *Comparative Civilizations Review*, No.74, 2016.

Nasr S. Hossein, *The Heart of Islam*, New York: Harper One, 2004.

インターネットサイト

<https://www.theguardian.com/us-news/2017/jan/28/trump-immigration-ban-syria-muslims-reaction-lawsuits> 二〇一七年九月二六日アクセス

<https://www.theguardian.com/us-news/2017/jan/28/trump-immigration-ban-syria-muslims-reaction-lawsuits> 二〇一七年九月二六日アクセス

(1) Huntington, Samuel, *The Clash of Civilizations*, New York: Simon & Schuster, 1996, pp.211-212.

(2) 二〇一七年一月二七日、トランプ大統領はイラン、イラク、リビア、ソマリア、スーダン、シリア、イエメン各国からのアメリカ合衆国への入国を九〇日間停止する大統領令を発表した。The Guardia 及び CNN 参照:

<https://www.theguardian.com/us-news/2017/jan/28/trump-immigration-ban-syria-muslims-reaction-lawsuits> 二〇一七年九月二六日アクセス

<https://www.theguardian.com/us-news/2017/jan/28/trump-immigration-ban-syria-muslims-reaction-lawsuits> 二〇一七年九月二六日アクセス

- (3) 井筒俊彦『コーランを読む』岩波書店、一九九五年、四三頁。
- (4) Esposito, John, L. (et al.), *The Oxford Encyclopedia of the Modern Islamic World Volume 2*. New York: Oxford University Press, 1995, p.377.
- (5) Nasr S. Hossain, *The Heart of Islam*, New York: Harper One, 2004, p.257.
- (6) 前掲書、二六二頁。
- (7) 片倉もとこ『イスラームの日常世界』岩波書店、一九九三年、一頁。加藤久典「インドネシアにおける多様なイスラーム」『比較思想研究』第四三号、比較思想学会、二〇一六年、七六～七七頁。
- (8) Kato, Hisanori, "Philanthropic Aspects of Islam: The Case of the Fundamentalist Movement in Indonesia," *Comparative Civilizations Review*, No.74, 2016, pp. 101-114.
- (9) 前掲書、一〇一～一〇四頁。
- (10) 大塚和夫編『イスラーム辞典』岩波書店、二〇〇二年：二〇〇九年改訂、五二頁。
- (11) Kato, Hisanori, *Verity or Illusion? Interfaith Dialogues between Christians and Muslims in the Philippines*. Jakarta: Centre of Asian Studies, 2008, p.41.
- (12) オランダ支配に抵抗したパドリ戦争（一八二一年—一八二八年）、ジャワ戦争（一八二五年—一八三〇年）やアチエ戦争（一八七三年—一九一二年）などがあるが、いずれもオランダ植民地支配を終わらせることはできなかった。
- (13) 永井重信『インドネシア現代政治史』勁草書房、一九八六年、四二頁。
- (14) 前掲書、四二頁。
- (15) 前掲書、二三頁。
- (16) 前掲書、二四頁。
- (17) 前掲書、二四頁。
- (18) パスキ・チャハヤ・プルナマ氏は、二〇一二年のジャカルタ知事選において知事候補として立候補したジョコ・ウイドド氏（現在インドネシア共和国大統領）とペアを組んで副知事として立候補し当選。二〇一四年のジョコ・ウイドド氏の大統領当選の際に、副知事から選挙を経ず昇格し、二〇一七年に初めての自身の知事選挙に臨んだ。
- (19) プルナマ氏は、コーラン第五章五一節にある「信じる人々よ、ユダヤ教徒やキリスト教徒を友としてはならない」という部分に引用しながら「このコーランの教えを利用してあなた方をだましている人がいる」と発言した。この発言の模様を撮影したビデオが YouTubeを通じて拡散したが、その Youtube はプルナマ氏の演説全体ではなく文脈をよみとることができないように編集されていた。
- (かとう・ひさのり、インドネシア地域研究、中央大学教授)